

# 中国国家図書館所蔵日本版古籍について

傅 璇 琮

精華大学中文系

## (一)

2001年2月19日から22日まで、国際日本文化研究センターは日本京都にて「中国に伝存の日本関係典籍」をテーマにシンポジウムを開催し、関係する日中の専門家たちが会議に参加した。私も要請を受けて参加させていただき、コメンテーターとして、会議の最終日に今回のシンポジウムについて簡単なコメントを述べさせていただいた。また会議が終わった後、笠谷和比古教授は私に元北京図書館、今の中国国家図書館に所蔵する日本版古籍について文章を書いて、論文集に載せるように希望された。私は北京に帰ってから早速国家図書館の善本部の李際寧先生に連絡を取り、これについて紹介文を書くようお願いした。というのは、1991年から1994年まで杭州大学（現浙江大学）日本文化研究所副所長の王宝平先生の提議で、『中国館蔵和刻本漢籍書目』の編纂作業が行われたが、当時李際寧先生もこの仕事に参加し、北京図書館の関係情報を提供されたので、これについては比較的詳しいという事情による。

王宝平先生がかつて『中国館蔵和刻本漢籍書目』の序文においてふれられたことだが、当時北京図書館善本部が報告した書目は141種あり、それぞれ貴重なものである。ところが、今、李際寧先生の紹介によると、国家図書館所蔵の日本版古籍は既に200種近くに達している。これはまことに喜ばしい現象であると思う。この現象から、この何年間で、館蔵の書籍が増加し、或いは再確認の結果新しい種目の発見があることが窺われる。今回の李先生の紹介によると、館蔵する日本の典籍は次のような特徴を持っていることが分かる。一、版本の年代は早い時期のものである。二、写本と抄本は全体の約半分を占めている。三、題跋、印章などの資料も保存されている。四、保存状態は良好であること。紙面が限られているため、この紹介では多数の書目を羅列することができないが、この紹介に概括された幾つの特徴は更なる確認と研究に大変貴重な情報提供になり、今後の進行上とても有利なことであることは言うまでもない。

私はここで簡単に二点補足説明しておきたいと思う。

第一、「中国に伝存の日本関係典籍と文化財」、このプロジェクトは中日文化交流の研究を促進する上で、新たな意義を持っている。中日文化交流は歴史上、書籍の相互に伝わることは重要な内容であった。しかし、過去の研究は中国の書籍が日本に伝わることに重点をおいてきたが、日本の関係漢籍、刻本と抄本を含めて、どのようにして中国に伝わり、中国に伝

わってから中国の文化、学術にどのような積極的な役割を果たしてきたかについては見落とされた傾向がある。この歴史上存在していた文化現象は、既に日本学術界では重要視されていた。しかし、中国の学術界はこれについての関心が不足していた。この状況は近年來変化があったが、『中国館蔵和刻本漢籍目録』に参加した各地の各大学の図書館は68館に達し、例えば今回2月の国際日本文化研究センターのシンポジウムに参加した湖北省博物館、雲南大学図書館はそれぞれ良い情報を提供した。従って、私は今後中国の図書館との共同作業を深め、『中国館蔵和刻本漢籍目録』を基礎に、確認作業を行うことを提案したい。例えば、『中国館蔵和刻本漢籍目録』の中の南京図書館の書目は、陸忠海先生がもともと作った『三百種日版漢籍管窺』によって著録したものであるが、2000年9月、日本の学者が杭州大学王勇先生らと一緒に南京図書館に確認に行った際、陸忠海先生が作った書目の中に、何種か南京図書館に所蔵していないものがあることと、南京図書館が現在実際に所蔵している一部の書籍は陸先生の書目に入っていないことが判明した。従って、もう一回網羅的に再確認し、完全且つ正確な書目を作る必要があると思う。同時に、それぞれの書籍について、書名だけではなく、刊刻と写しの年月、格式、題跋、蔵書印なども明記すべきである。これによって、この書目は比較的高い学術的レベルに達し、高い参考価値を持つことになる。

第二、書目を編纂すると同時に、提要を書くこと。膨大な作業量から考えると、提要は全部の書籍について書く必要はないが、時代が比較的古い、或いは価値が比較的高い一部の典籍について、提要を書いてもいいと思う。提要の内容は、著者、訳者の紹介以外に、その主な内容、文献資料としての価値及び格式を記し、またその中国に伝存する状況について考察すべきである。この仕事は、文化交流そのものの意義に適うことである。19世紀80年代楊守敬は日本で書籍を購入したときに、本の購入だけではなく、手に入った本がある度にその由来について簡単に考察し、別紙に記録した。それは「因以諸家譜録參互考訂、凡有異同及罕見者、皆甄録之」であり、またその後中国に帰ってからの「与同人樂相考証為之提要」（『日本訪書志』卷一、『緣起』）等である。彼は考察の過程においてまた日本の有名な蔵書家、学者の洪江道純と森立之が編纂した『経籍訪古記』（七卷）を参考とし、江戸時代の天瀑山人が編集した『佚存叢書』（一一〇巻、十七種の本を所収、本ごとに後ろに跋注を附し、その所蔵の源流を記録した）を充分参考にしたという。20世紀前期、中国の学者羅振玉が日本に滞在する間、彼の見た日本刻の漢籍について、やはり題跋を記した。（例えば「日本古写本『古文尚書・周書』殘卷跋」、「日本古写本『毛詩』單疏殘卷跋」、「宋刊本『廬山記』跋」等）先輩学者の方々の学問研究の経験は現在の我々にとって改めて回顧し、吸収するに値するものである。もしも三年或いは五年をかけて一定数の提要を編纂したら、中日文化交流史の一里塚となることになるだろう。この仕事も日中両国の学者の共同作業によって進めることができると思う。

## （二）中国国家図書館所蔵善本日本版古籍について

中国国家図書館の前身は清の学部に属した部隷京師図書館である。この図書館は1909年から準備し始め、1910年に正式に開館した。当時の所在地は方家胡同、後にまた数回遷移した。

民国以降は館名を「国立北平図書館」に改めた。1929年国立北平図書館は北海西側養蜂夾道で新館建設を計画し、1930年に新館が開館した。1935年日本軍が華北に近づき、民国政府は北平図書館の大部分の貴重図書を南に遷移し、スタッフも雲南、四川に移転した。抗日戦争が終わった後、1946年再び開館し、1950年に北京図書館に改め、文化部に属し、国家図書館としての地位を確立し、1998年正式に中国国家図書館に名を改めた。

中国国家図書館に所蔵する日本版古籍は、主に楊守敬の蔵書である。1915年に楊氏が亡くなり、次の年から楊氏蔵書を譲渡する話が出た。ちょうどこの時、袁世凱の帝政に強く反対した蔡鍔が病気で亡くなった。社会各界は彼を記念するために、蔡鍔の字松坡を取って、北海快雪堂で「松坡図書館」を創立し、社会各界より図書を収集していた。楊氏蔵書の一部分はここに入蔵した。1950年国立北平図書館は松坡図書館と合併し、北京図書館と名付けられた。楊守敬が松坡図書館に売った古籍はここに入蔵した。この中に、日本から購入した有名な南宋版『資福蔵』四千六百余巻と、日本版の古籍百四十余种が含まれている。現在、ここに所蔵する日本版の古籍は二百種近くになっている。

中国国家図書館善本部に所蔵する日本版の古籍は二つの部分からなっている。一つは日本で印刷刊行し、または日本で編纂した中国人の著述漢籍（中国で翻訳した仏教の經典も含む）；もう一つには漢文で書いた、または印刷した日本人の著作で、その版本の時代は奈良時代から明治以前にまでわたり、内容は伝統の経・史・子・集の各部分に及んでいる。

これらの典籍は以下の特徴をもっている。

#### 一、版本の年代が早い

中国国家図書館所蔵の日本古籍の中で、年代が最も早いのは古写本の仏教典籍である。これは中日両国文化交流を反映したものである。時代順に沿ってこれらの文献は次の時代に集中している。

##### 1) 奈良時代の写本

例えば、『四分律蔵』巻十四、写本、全部で19枚443行、巻末にこのような題字がある：「皇后藤原氏光明子奉為尊考贈正一位太政大臣府君尊妣贈從一位橘氏太夫人敬写一切經論及律、庄嚴即了、伏願憑斯勝因、奉資冥助、永庇菩提之樹、長遊般若之津。又願上奉聖朝、恒延福寿、下及寮采、共尽忠節。又光明子自發誓言、弘濟沈淪、勤除煩障、妙窮諸法、早契菩提、及至伝燈無窮、法布天下、聞名持卷、獲福消災、一切迷方、会帰覺路」。その後ろに「天平十二年五月一日記」と書いてある。

同じ題記が書かれているのはもう一件ある。それは『宝行王正論』一巻で、これも光明皇后「天平十二年五月一日記」と書いてあった。

この二巻の用紙、字体、写しの書式などは典型的な唐代麻紙写経と全く同じである。聖武天皇の時代に、光明皇后は宮中で写経を組織したことがある。今日まで伝わった光明皇后の写経は極めて珍しい。

##### 2) 奈良時代から平安時代まで

例えば、『薬師瑠璃光七佛本願功德経』二巻、日本古抄本。

これは二巻の巻物である。毎頁26行、一行につき16-18文字ある。二巻とも綺麗に保存され、巻首と巻尾はそれぞれ軸がついて、巻首は日本の伝統的な装幀になっている。用紙、字体、装幀などから、その年代はかなり古く、恐らく8-9世紀の写本であることが判断できる。この類の典籍の時代は、古屋七寺本古経と京都大徳寺の古経を参照すれば良い。

年代の近い古写経は他に例えば『金剛恐怖集会方軌議観自在菩薩三世最勝心明王経』、一冊。この写経の巻の端に半顆の古印があり、形はタワー状で、田中塊堂が編纂した『日本古写経現存目録』の古印部分第24頁にある『起信論』序題傍に所捺の印と全く同じである。ただ田中塊堂が録したのは墨印で、ここでは朱印である。

### 3) 五山時代

例えば『大正等大集経日藏分』十巻、日本古抄本。

この経は折り本式で、全部で十冊ある。写経用の紙は分厚く、均整が取れている。中国南宋時代の福州版大藏経用紙に類似している。この写経の年代はおよそ13世紀で、表紙に千字文の号「有」があり、巻内に朱印「古経堂印」が捺されている。巻末「文安二年釈永圭題識」があるが、これは後に書かれたものだろう。

これと時代の近いものに「一切経南部善光院」の朱印が捺されている仏教典籍がある。これらの経典は殆ど折り本式で、中の一部の用紙は筋目が荒く、紙質は比較的厚くて硬い。

しかし、同じ「一切経南部善光院」の朱印が捺されている経典でも、年代の差が大きい。例えば西晋竺法護訳『毘陀劫三昧晋日賢劫定意経』、十三巻、折り本装、表紙に千字文の「恃」があり、中に「一切経南部善光院」の朱印と「古経堂印」の朱印が捺され、裏面に方形の墨印「西山正顔」が捺されている。巻の中にはまた墨書「電覧 佛船」と「元禄年間於念仏寺方丈一授 佛船百拜」の文字が書かれている。その年代を見れば、平安時代の写経であることがわかる。

## 二、写本、抄本は約半分を占めている

前述したように、これらの写本、抄本の時代は天平期から、江戸時代の前期(17世紀中期)までである。これは本館善本部が典籍収蔵の規制に深く関わりがある。抄本、写本のうち、経・史・子・集各類が含まれ、仏教の経典が主である。仏経以外のものの多くは江戸時代のものである。

例えば、『黄帝内経太素注』三十巻、隋の楊上善撰；対経篇叙録一卷、日本の小島学古編集。全書は「宝素堂抄本」用紙で写し、細い黒の枠で、上に魚尾があり、半枚ごとに十行文字が書かれ、行間に罫線がある。中に嘉永二年(道光29年)の題識がある。

例えば、『令集解』五十巻、惟宗直本撰、現存三十五巻。裏に寛永の年号が書かれ、これは写しの年代かもしれない。本の後ろには「萬治庚子腊月下旬令一校畢」の文字が書かれ、それは校正の時の題識である。

これらの江戸期の写本は、その特徴が比較的明らかである。一般的にいうと、用紙は鞆皮であり、色が白く、繊維に光沢がある。紙は綿密、滑らかで、丈夫である。しかし、これらの写本、抄本の殆どは年月の記録をしていないので、具体的な年代の判明は難しい。



### 三、大量な題跋、印章の資料が残された

二百種に近い日本版古籍の中の、たくさんの書籍には題記、印章など貴重な資料が入っている。特に楊守敬の収蔵のなかに、『楊守敬集』に収録されていない題識が多く残されている。これらの題識は楊守敬の墨跡であるだけでなく、これを通じて、楊氏のこれらの書籍についての考証も窺える、実に得難い資料である。

例えば、『儀礼図』十七巻、宋の楊復著、全部で六冊。楊守敬は次のような題識を題している。「宋楊復の儀礼図十七巻、古抄本、巻首に吉家氏蔵印が有り、又称意館印、新宮城書蔵印が有る。巻毎の後に迷庵印、林下一人印が有り、これは市野光彦の旧蔵である。通志堂の刻本でこれと照合して、皆合っていた……」。

例えば古抄本『大乘入楞伽經』巻三の末にこのような題識がある。「大乘入楞伽經七巻、書いた年月は無いが、八九百年間にあるはず。此の巻の首尾題字を見て、唐經生格律に似ている。乙酉冬日守敬記」。

また例えば『彌勒菩薩所問本願經』一卷、巻末に「康治元年十月未時書寫了、大法師仁義」と書いてあり、楊守敬はこのような題跋を加えた。「日本の康治元年は、宋高宗紹興十二年にあたる。此の書は精緻ではないが、物寂しい情趣もある。乙酉三、守敬記」。

他には『春秋經伝集解』三十巻があるが、年代は明記されていない。版本は、二重の縁があり、太い黒の枠で、上下に魚尾があり、半頁毎に八行あり、行間に罫線がある。楊守敬は次ような題跋を題した。「これは日本の足利本の左伝で、注釈文がなく、唐本から由来するものである。山井鼎『七經孟子考文』の記載はこれと合っている。中土には宋本があるけれど、注釈がついていないものはない。山井鼎の時には既にこれが入手が難しいものだったと言ったが、ましてや今日。癸未參、守敬記」。

簡単な調査を行った結果、楊守敬の題跋以外に、入手が難しい資料がまた注目に値するものがある。例えば享保六年の刻本『古文孝經』巻末の跋に次のように書いてある。「後陽成帝敕板の長恨歌、野馬台、琵琶行は、長三寸三分、幅五寸、八行十七字、行幅七分ぐらいである。そうすると、この版本は敕板活字を翻刻したものだろうか。記録して後の考察を待とう。戊子二月十三夜燈下にて書く。森立之岐公」。

これらの題跋以外に、様々な印も捺され、例えば「称意館蔵書記」、「新宮城書蔵」、「仁和寺菩提院」など数十種類の印文があり、日本の古籍の収蔵場所や蔵書家の状況を把握する為の大きな手がかりである。

### 四、書籍の良好な保存状態

日本はその地理的位置から見ると、大部分の地方は湿気があり、暑くて、書籍は腐りやすく、虫くい状態になりやすいので、古籍の状態はよくない。中国国書館に所蔵する日本の古籍は、これらに比べてその保存状態は良好である。古写本は基本的に元来の装幀形式を保ち、字体、紙も原貌に近い。日本古代の写経制度、用紙規格、装幀材料などの研究に有利な条件を提供している。

刻印本の古籍、銅活字の印本を含め、その数量は全部古籍の半分を占めている。多くは江

戸時代のもので、その質が良く、古籍の元来の容貌を保っている。大部分の古籍は元来の牌記、題識などの資料も備えている。これらの典籍は紙が上等で、繊維のきめが細かく、紙色は光沢のある白で、紙質は丈夫である。書籍もインキの香りがまだ残っているように新しい。このような保存状態にある良好な資料を利用して、此の類の典籍の印刷、刊行の歴史について研究することは最も重要なことであろう。

# 关于中国国家图书馆所藏日本板古籍情况简介

傅璇琮

清华大学中文系

## (一)

2001年2月19日至22日，国际日本文化研究中心在日本京都召开“传存于中国的日本的有关典籍”研讨会，参加会议的有日本和中国的有关专家，我也被邀参加，还作为评议人，在会议的最后一天对这次研讨会作简要的评估。会议结束后，竺谷和比古教授希望我把原北京图书馆，现改名为中国国家图书馆所藏的日本板古籍写一材料，以列入会议的论文集。我返回北京后，就与国家图书馆善本部李际宁先生联系，请他就此写一介绍。因1991年至1994年杭州大学（现为浙江大学）日本文化研究所副所长王宝平先生创议，编纂《中国馆藏和刻本汉籍书目》，当时李际宁先生也参预此事，提供北京图书馆的有关情况。他对这方面的情况比较熟悉，因此我就请他撰写。

王宝平先生在《中国馆藏和刻本汉籍书目》书前的代序中曾提到，当时北京图书馆善本部所报的数目有141种，几乎每一种都很珍贵。现在李际宁先生所作的简介，提到现在国家图书馆所藏的日本版古籍已达到近200种。这是可喜的现象，说明这几年来馆藏有所增加，或经过核查，又发现一些新的品种。根据这次介绍，馆藏的日本典籍有这样几个特点：一、版本年代较早，二、写抄本约占总数一半，三、保留了许多题跋、印章等资料，四、书品保存较好。限于篇幅，这一介绍当然不可能罗列众多的书名，但应当说，这一介绍所概括的几个特点，为进一步核查和研究提供宝贵的信息，对今后工作的开展极为有利。

这里我想再简要说明两点。

第一，关于传存于中国的日本有关典籍，这一课题项目对促进中日文化交流的研究，很有创新的意义。中日文化交流，在历史上，书籍的互相流传是重要的内容。但过去的研究，往往着重于中国书籍的传往日本，而忽视日本的有关汉籍，包括刻本和抄本，是怎么传到中国，以及传到中国后对中国的文化学术起了怎样的积极作用。这一历史上存在过的文化现象，已经受到日本学术界的重视，而中国学术界过去是重视不够的，近几年来则有所变化。《中国馆藏和刻本汉籍目录》，参与的各地、各大学的图书馆有68家；这次二月份在国际日本文化研究中心参加会议的，如湖北博物馆，云南大学图书馆，都提供很好的材料。因此我建议，下一步应更加强与中国的图书馆合作，在《中国馆藏和刻本汉籍目录》的基础上，做一次核

实的工作。如《中国馆藏和刻本汉籍目录》中的南京图书馆书目，是据陆忠海先生原先所作的《三百种日版汉籍管窥》著录的，但2000年9月日本学会同杭州大学王勇先生等一起到南京图书馆核查，却发现陆忠海先生的草拟的书目，有好几种南京图书馆未藏，而南京图书馆现在实际所藏的有些书，陆的书目中却没有。因此最好再普遍核查一遍，作一个完全、确切的书目。同时，每一种书，不只标出书名，还应注明刊刻和抄写年月，行款格式，以及提跋、藏书印等，这就使这一书目有较高的学术水平和参考价值。

第二，在编目的同时，进行提要的撰写。提要不必每一种书都写，这样工作量太大，但可以对一部分时间较早或价值较高的书籍，撰写提要。提要的内容，除了简要介绍著者，译者外，还应记述其主要内容和文献资料价值，以及行款格式，同时考察其在中国流传的情况。这样做，当更符合文化交流本身的意义。十九世纪八十年代杨守敬在日本购书，就不只是购买，他每得一书，即略为考其原委，别纸记之，“因以诸家谱录参互考订，凡有异同及罕见者，皆甄录之”，他还表示以后回中国，当“与同人乐相考证为之提要”（见《日本访书录》卷一《缘起》）。他在寻访过程中还充分参考了日本著名藏书家，学者涩江道纯和森立之编撰的《经籍访古记》（七卷）。日本江户时代天瀑山人编《佚存丛书》110卷，收书17种，每一种书的后面都附有跋注，记起收藏源流。二十世纪前期，中国学者罗振玉，在日本居住期间，就其所见到的日本刻写汉籍，也作有题跋（如《日本古写本〈古文尚书·周书〉残卷跋》，《日本古写本〈毛诗〉单疏残卷跋》，《宋刊本〈庐山记〉跋》等）。前辈学者的治学经验是很值得我们现在重新加以回顾和汲取的。如果我们用三年、五年的时间编出一定数量的提要，将为中日文化交流史上树起一个里程碑。这也可以由中日两国学者共同合作进行。

## （二）

### 中国国家图书馆善本部藏日本版古籍简介

中国国家图书馆的前身是前清学部所属部隶京师图书馆。本馆自1909年筹备，1910年开馆。其时馆址在方家胡同，后又数度迁址。民国以后馆名亦改为“国立北平图书馆”。1929年国立北平图书馆于北海西侧养蜂夹道筹建新馆，1930年新馆开放。1935年由于日军逼近华北，民国政府遂将北平图书馆大部分贵重图书南迁，人员撤往云南、四川。抗日战争胜利以后，于1946年复馆。1950年改名为北京图书馆，隶属于文化部，司国家图书馆职能。1998年正式更名为中国国家图书馆。

中国国家图书馆所藏的日本版古籍，主要是杨守敬所藏品。1915年杨守敬去世，越明年杨氏藏书欲寻转让。此时正值坚决反对袁世凯称帝的蔡锷病逝。社会各界为纪念他，以蔡锷字松坡为名，在北海快雪堂设立了“松坡图书馆”，面向社会各界征集、采购图书。杨氏藏书的一部分遂入该馆。1950年国立北平图书馆与北海松坡图书馆合并，更名为北京图书馆，

原杨守敬与松坡图书馆的古籍入藏书馆，这中间包括从日本购回的著名南宋版《资福藏》四千六百余卷，以及日本版古籍一百四十余种。至今，本馆所藏日本版古籍达到了近 200 种。

中国国家图书馆善本部收藏的日本版古籍包括两部分内容，第一部分为日本刊印或书写的中国人撰述的汉籍（包括在中国翻译的佛教经典）；第二部分为用汉文书写或刊印的日本人的著作。其版本时代上迄日本奈良时期，下至明治以前，内容涉及传统经、史、子、集各个部分。

这些典籍概括起来有如下特点：

#### 一、版本年代较早

中国国家图书馆藏日本古籍年代最早的是一批古写佛教典籍，这也是中日两国文化交往的真实写照。依时代这类文献又相应集中在以下几个时期：

##### 1) 奈良时期写本

如：《四分律藏》卷十四，写本，共 19 纸 443 行，卷尾题：“皇后藤原氏光明子奉为尊考赠正一位太政太臣府君尊妣赠从一位橘氏太夫人敬写一切经论及律，庄严即了，伏愿凭斯胜因，奉资冥助，永庇菩提之树，长游般若之津。又愿上奉圣朝，恒延福寿，下及寮采，共尽忠节。又光明子自发誓言，弘济沉沦，勤除烦障，妙穷诸法，早契菩提，及至传灯无穷，法布天下，闻名持卷，获福消灾。一切迷方，会归觉路。”后属“天平十二年五月一日记”。

相同题记的还有一件《宝行王正论》一卷，亦署光明皇后“天平十二年五月一日记”。

这两卷的用纸、字体、抄写行款等，与典型的唐代麻纸写经完全相同。圣武天皇时期，光明皇后在宫内组织抄经，今日流传下来的光明皇后下经非常宝贵。

##### 2) 奈良至平安之间

如：《药师琉璃光七佛本愿功德经》二卷，题日本古抄本。

该件为卷轴式装帧，共两卷。每纸 26 行，行 16—18 字不等。每卷保留较完整，首有天杆，卷尾有轴，护首为日本传统装潢。从纸张、字体、装潢等角度观察，可以判断其年代较早，定为 8—9 世纪写本是可能的。关于这类典籍的时代，可参照名古屋七寺本古经和京多大德寺本古经。

相近年代的古写经还有，如《金刚恐怖集会方轨仪观自在菩萨三世最胜心明王经》，一册。本册卷端存古印半枚，形似塔状，与田中块堂编《日本古写经现存目录》古印部分第 24 页著录的“《起信论》序题傍に所捺”者完全相同。惟田中著录者为墨印，而此本为朱印。

##### 3) 五山时代

如：《大方等大集经捷经录》十卷，题日本古抄本。

该经为经折装，共十册。写经纸染黄，纸质较厚而匀，类似中国南宋时期的福州版大藏经用纸。本册年代大致相当于十三世纪。封面有千字文号“有”，卷内有朱印“古经堂印”。卷后题“文安二年释永圭题识”，当是后代写记。

时代相近者还有一批鈐有“一切经南部善光院”朱印的佛教典籍，这批经典基本为经折装，其中相当一些用纸帘纹较粗，纸质较厚硬。

不过，鈐有“一切经南部善光院”朱印的经册，年代差距几乎也很大。比如西晋竺法护译《毘陀劫三昧晋曰贤劫定意经》，十三卷。经折装，封面有千字文“恃”，内页鈐朱印“一切经南部善光院”，“古经堂印”，卷背又有方形墨印“西山正颜”。卷中还有墨书“电览 佛船”和“元禄年间于念佛寺方丈一授 佛船百拜”字样。观其年代，当属平安时代写经。

## 二、写抄本约占总数一半

这些写抄本的时代如上所述，上起天平时代，下线则约在江户时代前期（十七世纪中期），其中主要原因在本馆善本部对典籍入藏标准的控制。抄写本内经史子集各类均有，而以佛经为主，非佛经部分抄写年代多为江户时代。

如：《黄帝内经太素注》三十卷，隋杨上善撰；对经篇叙录一卷，日本小岛学古辑。全书用“宝素堂抄本”笺纸抄写，细黑口，上鱼尾，半叶十行，行间有栏线。内有嘉永二年（道光29年）题识。

如：《令集解》五十卷，惟宗直本撰，现存三十五卷。卷册後署宽永年号，这或者是抄写年代欤？书后又有“万治庚子腊月下旬令一校毕”字样，当是校读题识。

这批江户时代的写本，特征比较明显，一般说来，纸质为韧皮，色白而纤维发亮，纸细而匀，韧性极好。但由于这些写抄本多不记录年月，究竟绝对年代定位何时，非经史料证明，一时难以断定。

## 三、保留了许多题跋，印章等资料

在近两百种日本版古籍中间，许多书中留有题记、印章等宝贵资料。特别是杨守敬藏品中，还保留了不少未收入《杨守敬集》的题识。这些题识不久保留了杨守敬的墨迹，也保留了杨氏对这些书籍的考证，极为难得。

如：《仪礼图》十七卷，宋杨复撰。共六册。杨守敬题云：“宋杨复仪礼图十七卷，古抄本，首有吉家氏藏印，又有称意馆印，新宫城书藏印。每卷後有迷庵印，有林下一人印，盖市野光彦之旧藏，心（？）以通志堂课本照之，皆合……。”

如：古抄本《大乘入楞伽经》卷三末题：“大乘入楞伽经七卷，无书写年月，然当在八九百年间。观此卷首尾书题，犹是唐经生格律。乙酉冬日守敬记。”

又如：《弥勒菩萨所问本愿经》一卷，卷末题：“康治元年十月未时书写了，大法师仁义。”杨守敬题跋曰：“按日本康治元年，相当于宋高宗绍兴十二年。此书虽不工，颇有萧散之志。乙酉叁，守敬记。”

再如：《春秋经传集解》三十卷，无年款。有关版本方面的信息只知为四周双边，粗黑



口，上下花鱼尾，半叶八行，行间有栏线。杨守敬题跋云：“此日本足利本左传，不附释文，根源于唐本，山井鼎《七经孟子考文》载之兹一一与之合。中土虽有宋本，然未有不附音者。日本再山井鼎时已称难得，何论今日。癸未叁，守敬记”

经粗略调查得知，在杨守敬题跋以外，尚有难得资料值得注意，如享保六年刻本《古文孝经》卷末存跋一道：“後阳成帝赦板长恨歌、野马台、琵琶行，长三寸三分，幅五寸，八行十七字，每行幅七分约。据此，则此本亦盖翻刻赦板活字者欤？录待後考。戊子二月十三夜书于灯下。森立之歧公。”

题跋以外，各书往往鈐有印记，如“称意馆藏书记”、“新宫城书藏”、“仁和寺菩提院”等等，不下数十种，皆有资于了解日本古籍收藏单位和藏书家情况。

#### 四、书品保存较好

日本由于地理位置所至，大部分地区气候湿热，书籍易于霉变和虫蛀，古籍的书品往往不佳。中国国家图书馆收藏的日本古籍，相对而言，其状况要好些，古写本基本保留了原装帧形式，字体、纸张亦一如原貌，为深入研究日本古代写经制度、用纸规格、装潢材料等提供了有利条件。

刻印本古籍，包括铜活字印本，数量约占全部总数的一半左右，时代多在江户，绝大部分保留了原书外貌，书品上佳，大部分还保留了原书牌记、题识等有资版本考证的资料。这部分典籍，往往纸张纤维细腻，色彩莹白，纸质韧而匀，而书则犹存墨香。利用这样的条件，排列比较有关版本资料，对深入理解此类典籍刊印历史尤为重要。